

対談シリーズ「核・コロナ・気候変動 — 問題の根っこにあるもの」

吉田 文彦

新型コロナウイルス(COVID19)——この見えない病原体が世界に飛び出してこなかったら、2020年8月9日には東京五輪の閉会式が予定されていた。国内外の多くの人々が注目するこの日に、いかにして被爆地からメッセージを発信していけばいいのか。年初めにはそんなことに思いをめぐらせていた記憶がある。

コロナ禍を脅威に感じるようになり、やがて東京五輪は延期となった。今度は、数々のイベントなどが中止・延期になるなか、8月9日に向けて何をどのように発信していけばいいのかについて、考えなくてはならなくなった。長崎原爆資料館も臨時休館に追い込まれる事態になってしまった。

しかし、である。資料館からの発信に休みはなかった。「このような状況下であっても、今年が被爆75周年の重要な節目の年であること、今後に向けての大きなステップの年にしなければならないことに何ら変わりはありません」との決意から、次のような「被爆から75年 長崎からのメッセージ」を玄関付近に掲げた。

◎核兵器、環境問題、新型コロナウイルス… / 世界規模の問題に立ち向かう時に必要なこと / その根っこは、同じだと思います / 自分が当事者だと自覚すること / 人を思いやること / 結末を想像すること / そして行動に移すこと / 被爆75周年の今年、さあ、一步を踏み出しましょう！

このメッセージが、自分の中で共鳴するのを感じた。それほど時を置かず、PCのキーボードで企画書を書き始めた。そして、核兵器廃絶長崎連絡協議会(長崎県、長崎市、長崎大学で構成)主催の被爆75年企画として、対談シリーズ「核・コロナ・気候変動——問題の根っこにあるもの」を制作することになった。RECNAの教員が、田上富久・長崎市長を皮切りに、核・コロナ・気候変動の各分野の専門家と対談し、それを動画におさめてオンライン配信する企画である。

実現した対談は計6回で、第1話「田上市長と広瀬訓・中村桂子」/第2話「山本太郎・長崎大学熱帯医学研究所教授と吉田文彦」/第3話「安田二郎・長崎大学感染症共同研究拠点教授と吉田」/第4話「高村ゆかり・東京大学未来ビジョン研究センター教授と鈴木達治郎」/第5話「作家の佐藤優氏と吉田」/第6話「中満泉・国連事務次長と吉田」という、多彩で豪華な顔ぶれにご登場いただいた。

どなたも企画の趣旨に快く賛同し、対談につきあってくださった。きらりと光る、たくさんの言葉が生まれ、被爆地発で飛び立っていった。

コロナ禍でのオンラインのパワー。そこに気づかされたのも、この企画がきっかけだったように思う。[こちら](#)で引き続き配信中ですので、ぜひご覧ください。

(よしだ ふみひこ、RECNAセンター長)

《被爆75年対談シリーズ》

核・コロナ・気候変動

問題の根っこにあるもの

ゲスト

- | | | |
|-----|--------|----------|
| 第1話 | 田上 富久 | (長崎市長) |
| 第2話 | 山本 太郎 | (長崎大学教授) |
| 第3話 | 安田 二郎 | (長崎大学教授) |
| 第4話 | 高村 ゆかり | (東京大学教授) |
| 第5話 | 佐藤 優 | (作家) |
| 第6話 | 中満 泉 | (国連事務次長) |

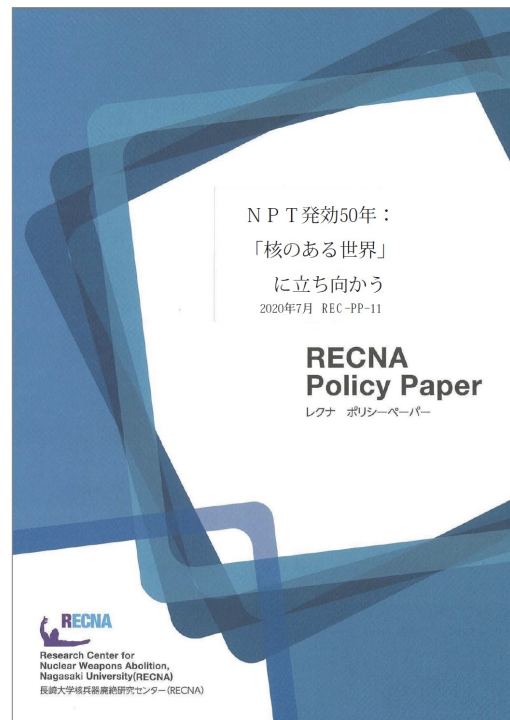
被爆75年対談シリーズ 核/コロナ/気候変動 問題の根っこにあるもの

核不拡散条約(NPT)が発効して、今年は50周年にあたる。NPTが核軍縮・不拡散に大きな貢献を果たしてきたことに異論をはさむ人はいないだろう。しかし、50年前と今では、NPTをめぐる安全保障環境も、政治経済情勢も大きく異なる。一方、核兵器をめぐる情勢は極めて厳しい状況にある。そこで、この50年間を振り返って、NPTの成果を評価するとともに、現在の抱えている課題、そして、今後どのようにその課題を乗り越えていけばよいのか。それらの質問に答えるべく、RECNA教授陣や外部の専門家をお願いして、まとめたのが今回のポリシーペーパーである。

第1章は「NPT論：この50年から何を学ぶか」と題して、NPTの半世紀を振り返る。最初の「NPTの成果と課題」(吉田・広瀬)は核不拡散に相当程度の効果を発揮してきたことを評価する一方、核軍備管理条約としてのNPTを厳しく批判している。次の「核兵器禁止条約(TPNW)とNPT」(中村)は、これからはTPNWとNPTが並走する時代となるとし、TPNWもたらず国際的規範がNPT第6条履行の強化に繋がるよう、市民社会の役割が重要と強調している。「原子力平和利用の課題と挑戦」(鈴木)は、核不拡散・セキュリティ対策で新たな脅威が台頭しており、NPTだけでは対応が困難と指摘、新たな国際的枠組みの在り方を検討すべきとしている。

第2章は「安全保障論：核兵器依存からどう脱するか」と題して、核抑止論をいかに乗り越えるかを論じている。「核抑止論の限界と危険」(吉田)では、限定核戦争が全面核戦争に拡大するリスクや、核抑止が崩れて核使用された後の安全保障政策への対応策の欠如を指摘して、核抑止論依存のリスクを指摘している。「先端技術がもたらす核抑止依存のリスク」(鈴木)は、サイバーやAIなどの軍事利用により、核抑止の信頼性が崩れ、リスクが高まるとともに、核抑止をめぐる情勢は全く新しい時代に入ったと指摘している。「日米同盟と核の傘」(吉田)は核の傘に依存するほど、対立する核武装国からのミサイルの標的になるリスクが高まりかねないとし、「核の傘は本当に日本の安心に資するのか」と疑問を呈している。「核使用・威嚇の違法性」(広瀬)は、国際法、特に国際人道法の視点から核使用の問題点を指摘し、日本が核抑止依存することで、首相などの関係者が被疑者として含まれる可能性を指摘した。「北東アジア非核兵器地帯(NEA-NWFZ)と地域安全保障」(吉田・鈴木)は、NEA-NWFZのもたらす安全保障上のメリットを検証し、日米同盟関係を維持しつつ、核の傘依存度を大きく減少させることのできる構想として評価している。

第3章は「アクター論：誰がどう行動するのか」と題して、国家のみならず様々なアクター(行動主体)について論じている。



RECNA ポリシーペーパー (REC-PP-11)
「NPT発効50年：『核のある世界』に立ち向かう」

「核保有国、核の傘国、TPNW支持国」(吉田)は、それぞれの立場で、NPTとTPNWの並走する時代に合った行動の在り方を指摘している。「これから被爆地が果たすべき役割」(朝長)は、TPNWの提案から成立に至るまでの市民社会の役割を評価し、今後はNPTとTPNWの相互補完関係をどのように進めていくかを議論する場が必要としている。「被爆した新聞社の使命」(宮崎)は、中国新聞の原爆・核報道に関する基本姿勢を解説し、核被害の実態を世界に伝えていく使命を強調している。「安全保障政策と市民社会：核兵器廃絶日本NGO連絡会を事例として」(河合)では、同NGO連絡会のこれまでの活動を総括し、今後は「政府セクターのみならず、市場・経済への働きかけもある」との結論を導いている。

第4章は「未来構想論」(吉田、鈴木、広瀬、中村)として、今後実行すべき政策を整理している。ここまでの基本的問題意識を整理するとともに、今後実行すべき政策として、「核軍縮の実質的な進展のための賢人会議」の議長レポートが提起している項目について、①ジュネーブ軍縮会議以外の選択肢、②条約から政府間合意や行動規範へ、③多様なアクターの参加・関与、を上げている。最後にパンデミックの教訓として、「安全保障観のパラダイムシフト」が加速する可能性や、核軍縮・不拡散政策を強化する方向で地殻変動をもたらす可能性を指摘している。

(すずき たつじろう、RECNA副センター長)

被爆者の高齢化が進み、体験の風化が叫ばれる中、「核なき世界」に向かう若い世代を対象とする「軍縮教育」の普及・拡大が喫緊の課題となっている。2017年に国連で採択され、発効が時間の問題となった「核兵器禁止条約」も、その前文において軍縮教育の重要性に触れている。

RECNAでは、こうした問題意識を共有する国際基督教大学平和研究所(ICU-PRI)と協力し、2019年度から「軍縮・平和教育」に関する共同研究を開始した。長崎大学とICUは、昨年3月に「包括的連携協力に関する協定」を締結しており、軍縮・平和教育は研究協力における一つの柱に位置付けられている。

今年2020年度には、ICU-PRI所長の笹尾敏明教授を研究代表者として、核軍縮、平和、開発教育、ICT教育などを専門とする両校の研究者7名が参画する共同研究プロジェクト「日韓共同による軍縮・平和教育プログラムの作成・実践・評価：教育学的アプローチ」が科学研究費の助成を受けてスタートした。3年間のプロジェクトでは、日韓両国の大学生世代を対象とした平和・軍縮教育のプログラムを策定、実践、評価し、他地域にも応用できる普遍的なプログラム開発の一步とすることを計画している。

歴史的背景や地政学的状況の違いから、「平和」と一言で言っても、日本と韓国では人々の受け止めが大きく異なる。とりわけ昨今の両国における政治的緊張を受け、そうしたギャップはいつそう拡大しているように見受けられる。こうした現実を踏まえ、RECNAとICU-PRIの共同研究は、日韓の相違を超えて、共通の利益である核リスクの緩和、さらには北東アジア地域の非核化の実現に貢献できるような平和・軍縮教育の在り方について、理論的、実践的に探っていくものである。初年度である今年も、日本、韓国において平和・軍縮教育がどのように実施されているのかの実態調査を行い、その分析を基にプログラム開発を進める。二年目には、パイロットプログラムを使って日韓の大学において実際に授業を行い、その評価を行う。最終年度の三年目にはプログラムの改善とまとめを予定している。

なお、RECNAは今年11月25日(水)に、被爆75年記念行事として、軍縮教育をテーマにした特別シンポジウム「平和・軍縮教育の新たな展開 核兵器禁止条約の時代を見据えて」を企画している(7ページ参照)。シンポジウムの中では、ICU-PRIとRECNAの共同研究に関する中間報告も行う予定である。

(なかむら けいこ、RECNA准教授)

令和2年 長崎平和宣言 75年目の「核のある世界」

被爆から75年の「節目の年」、コロナウィルスによる感染拡大という予想もしていなかった状況の中で、今年の平和式典は規模を大幅に縮小して開催された。75年もの間、被爆者がずっとその恐ろしさを訴え、廃絶を求めてきたにもかかわらず、核兵器は一向に無くなり、むしろ核兵器保有国の数は増してきた。現在の世界の情勢も原子力科学者会報(Bulletin of the Atomic Scientists)が世界滅亡への猶予を象徴的に訴えるために使っている「終末時計」の針が初めて終末まで残り「2分」を切るほど深刻になっている。しかし、そのような厳しい情勢の中で、私たち市民一人一人は果たしてどのぐらいの危機感を持っているだろうか。それが今年の長崎平和宣言の基本的な問いかけである。

コロナウィルスによる感染拡大は、世界中の多くの人々に「感染症の問題は自分の問題」だという当事者意識を広げる結果となり、多くの人々にマスク、手洗い、ソーシャルディスタンスという新しい生活様式へと目を向けさせる契機となった。しかし、コロナウィルスの感染拡大が直ちに人類全体を滅亡させる可能性は極めて低い。それに比べて核兵器の使用がた

だちに人類の滅亡に直結しかねないという点では、核兵器こそ人類全体にとってより深刻な脅威だと言わなければならない。それにもかかわらず、私たちは「核兵器の問題は自分の問題」だという真剣な「当事者意識」をどれだけ持っているだろうか、この機会に真剣に問い直さなければいけない。

核兵器の問題というと、国家の政策の問題であって、大国や核兵器を持っている国の問題であり、一般の市民には遠い問題だという、当事者意識の希薄さ、自分にはどうすることもできないという諦めがあるのではないだろうか。しかし、今年の平和宣言でも被爆した市民の言葉が引用されているように、原爆が使われた際に実際に犠牲となり、無残に命を落とし、あるいは長い間苦しんできたのは何万、何十万という一般の市民なのである。世界に核兵器の存在する限り、自分が次の核の犠牲者にならないという保証はどこにもない。被爆者の方々はその恐ろしさを75年間訴え続けてきた。その言葉をどれだけの人々が「自分の問題」として受け止めてきたのか。このままでは「伝わらない」という被爆者の方々が抱えている大きなもどかしさを残したまま、被爆者のいない世界が到来してしまう。

核兵器は感染症のように自然に発生するものではない。人間が意図的に造り出しているものである。従って人間の意思によって100%廃絶することが可能であり、そのために必要な条約もすでに採択されている。その実現を阻んでいるのは人間の意思に他ならない。そしてその結果私たちは常に自分を次の核の犠牲者とする危険に進んで身をさらしていると言わなければならない。コロナウィルスの感染拡大に対しこれだけ多くの

市民と政府が短期間に危機感を共有し、対策を講じることが可能ならば、より深刻な脅威としての核兵器の問題を共有し、すべての人が自分の問題として取り組むことができないでいるのはなぜなのか、被爆地からのいらだちと同時に、人々の自覚さえあれば、世界を変えることは可能だという希望を表す今年の平和宣言である。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

活動を振り返って

ナガサキ・ユース代表団第8期生

ナガサキ・ユース代表団第8期生は2019年12月に任命されてから2020年8月まで活動を続けてきました。具体的には、1945年の広島と長崎における原爆の実相から核兵器の現代情勢に至るまで、RECNAの先生方や外部講師の皆様をお招きし、約30回の勉強会を重ねました。さらに被爆地である長崎にのみ学びを留めるのではなく、広島にも足を運び2泊3日をかけて学びを深めました。4月末にはNPT再検討会議開催にあたりニューヨーク国連本部に派遣される予定でしたが新型コロナウイルスの感染拡大を受け、渡航は中止となりました。そのため主にオンラインでのイベント開催等に切り替えました。

5月下旬には、Zoomを用いて英語でのオンラインイベントを開催しました。イベントの題名は『All humans could be next

Hibakushas, All humans could make others be Hibakushas (人類みなヒバクシャになり得る、人類みなヒバクシャを生み得る)』です。核兵器が存在する世界に生きる私たちは、誤爆など核兵器の使用によってヒバクシャになり得るリスクを抱えており、核兵器の存在を容認し、頼ることで逆にヒバクシャを生む側に立つかもしれないという思いを込めました。核兵器の現状や戦争加害の歴史など様々な観点に触れて説明したことで、参加者から「核兵器問題について、より身近に感じる事ができた」という感想もいただきました。国内外の様々な地域からの参加者約90名に、私たち8期生の思いを発信することができました。

7月下旬には『ナガサキ・ユース代表団8期生 活動報告会 “For Our Future” ~人類みなヒバクシャになり得る、人類み



オンラインに並んだナガサキ・ユース代表団第8期生

なヒバクシャを生み得る〜』を開催しました。会場の様子をオンラインで同時配信するという新たな方法でイベントを開催し、会場とオンライン合わせて約70名の方々が参加してくださいました。8期生の集大成ともいえるこのイベントでは、今まで学んだこと、考えたこと、話し合ったこと、そして、すべてを通して得た私たちの想いについて発表しました。核問題を自分事として捉えてもらいたいという思いから、様々な社会問題において「無関心であっても、無関係ではいられない」という話をしました。私たちの活動の原動力にもなったこの意識を多くの方と共有できたことは、私たち8期生にとってとても大きなステップだったと感じています。

8月9日には、日本人女性初の国際連合事務次長として軍縮担当を務められている中満泉さんにお話を伺う機会をいただきました。

安全保障や人道支援の第一線で活躍されてきた中満さんにとっての“平和”とはどういった状態かを伺ったところ、「全ての人が安全に暮らせる社会。ただし、戦争をしていなければ平和というわけではなく、社会から誰も取り残されないことが理

想」とお話しして下さいました。また、長く海外で生活をされ、スウェーデン人の旦那様がいらっしゃる中満さんは、ご自身の経験から身に付けた価値観を共有してくださいました。“日本の常識は決して世界の常識ではないということ”や“人の話を理解するには一つの考えに捉われず様々な角度からの知識をつけること”という考え方は、世界の現実を見てきた中満さんだからこそのお言葉で、とても説得力がありました。

そして最後に、「日本人は真面目すぎるところがあるので、枠からはみ出ることを恐れずにもっと色々なことに挑戦してほしい。特に若い人には自分の頭で考えて行動することを期待しています」というメッセージをいただきました。私たちも中満さんのように力強く、自分の信じた道を進んでいきたいと感じることができました。

今後は8期生の活動全体を通して得た経験と学びを活かし、それぞれの道で、核問題・核廃絶について考え、発信し続けたいと思います。

(ながさき ゆーす だいひょうだん だい8きせい)

RECNAの活動

2020年4月1日～2020年9月30日

4月3日(金)	レクナの日「核不拡散条約(NPT)50年の節目:再検討会議延期を踏まえて」記者会見:吉田センター長、鈴木副センター長、中村准教授 場所:市政記者室(長崎市役所)	場所:RECNA1階会議室
4月18日(土)	軍縮学会研究大会(オンライン):吉田センター長、鈴木副センター長、広瀬副センター長、中村准教授	
4月29日(水)	ピースポート「オンラインNPT再検討会議」講演:中村准教授	
5月24日(日)	ナガサキ・ユース代表団8期生オンラインイベント「人類みなヒバクシャになり得る、人類みなヒバクシャを生み得る」:ナガサキ・ユース代表団	
5月25日(月)	ナガサキ・ユース代表団オンラインイベント実施報告記者会見(オンライン):調副学長、吉田センター長、ナガサキ・ユース代表団	
5月26日(火)	長崎大学RECNA及び国際基督教大学PRIIによる「軍縮教育」共同研究についてのオンライン記者会見:吉田センター長、中村准教授	
5月27日(水)	核兵器廃絶長崎連絡協議会総会	
5月30日(土)	被爆75年企画「核・コロナ・気候変動一問題の根っこにあるもの」第1回収録:広瀬副センター長、中村准教授 鼎談者:田上富久 長崎市長 場所:長崎原爆資料館地下1階「いこいの広場」	
6月5日(金)	被爆75年企画「核・コロナ・気候変動一問題の根っこにあるもの」第2回収録:吉田センター長 対談者:山本太郎 長崎大学熱帯医学研究所教授 場所:長崎原爆資料館2階会議室	
6月9日(火)	2020年度版「核弾頭・核物質ポスター」完成記者会見:調副学長、吉田センター長、鈴木副センター長、中村准教授 場所:長崎大学文教キャンパス事務局3階第2会議室	
6月12日(金)	被爆75年企画「核・コロナ・気候変動一問題の根っこにあるもの」第3回収録:吉田センター長 対談者:安田二郎 長崎大学感染症共同研究拠点 教授 場所:長崎原爆資料館2階会議室	

6月16日(火)	被爆75年企画「核・コロナ・気候変動一問題の根っこにあるもの」第5回収録:吉田センター長 対談者:佐藤優 作家 (オンライン) 場所:KTNスタジオ	8月3日(月)	核兵器と安全保障を学ぶ広島—ICANアカデミー 講演(オンライン):鈴木副センター長
6月16日(火)	被爆75年企画「核・コロナ・気候変動一問題の根っこにあるもの」第4回収録:鈴木副センター長 対談者:高村ゆかり 東京大学未来ビジョン研究センター 教授 (オンライン) 場所: KTNスタジオ	8月3日(月)	核兵器と安全保障を学ぶ広島—ICANアカデミー 講演(オンライン):中村准教授
6月19日(金)	被爆75年企画「核・コロナ・気候変動一問題の根っこにあるもの」第6回収録:吉田センター長 対談者:中満泉 国連事務次長・軍縮担当上級代表 (オンライン) 場所: KTNスタジオ	8月4日(火)	平和首長会議「現下の核兵器を巡る国際情勢」 講演(オンライン):中村准教授
6月25日(木)	『平和と核軍縮』誌(J-PAND)第3巻1号発行記者 会見:吉田センター長、山口客員研究員 場所:長崎大学文教キャンパス事務局第2会議室	8月8日(土)	ピースアクションinナガサキ 虹のひろば記念講演: 中村准教授 場所:ホテルクオーレ長崎レンタルオフィス
6月27日(土)	2020年度核兵器廃絶市民講座講演:広瀬副セン ター長、中村准教授、ナガサキ・ユース代表団 8期生 第1回「NPT再検討会議に向けた課題」 場所:長崎原爆資料館地下1階ホール(オンライ ン併用)	8月9日(日)	原爆犠牲者慰霊祭出席:吉田センター長 場所:医学部記念講堂
7月11日(土)	「科学技術とリスクコミュニケーション—自律型致 死兵器システム(LAWS)の問題を考える視点—」 シンポジウム出席(オンライン):鈴木副センター長	8月9日(日)	被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 出席:鈴木センター長、中村准教授、ナガサキ・ ユース代表団 場所:平和祈念公園
7月16日(木)	RECNAポリシーペーパーNo.11「NPT発効50年: 『核のある世界』に立ち向かう」発行記者会見:吉 田センター長、鈴木副センター長、広瀬副セン ター長、中村准教授 場所:RECNA1階会議室	8月9日(日)	被爆75年特別番組への出演:吉田センター長 場所:NHK長崎放送局
7月25日(土)	ナガサキ・ユース代表団8期生活動報告会「For Our Future 人類みなヒバクシャになり得る 人類 みなヒバクシャを生み得る」:ナガサキ・ユース代 表団 場所:長崎大学文教キャンパス グローバル教育・ 学生支援棟4階 スカイホール (オンライン併用)	8月17日(月)	長崎平和推進協会 青少年平和交流事業学習 会講演:広瀬副センター長 場所:原爆資料館
7月26日(日)	ハワイと長崎の高校生へ核兵器の現状について: オンライン講演 中村准教授	8月27日(木)	被爆者支援核廃絶議員連盟会議出席:吉田セン ター長
7月28日(火)	Zoomイベント「声紋源場」出演:吉田センター長 テーマ:軍縮と感性	9月15日(火)	核遺産・核政策研究会(オンライン):鈴木副セン ター長、広瀬副センター長、山口客員研究員、 桐谷客員研究員
7月31日(金)	被爆75年記念事業「ナガサキ・シナリオプロセス: パンデミックと核リスク」開催に関する記者会見: 吉田センター長、鈴木副センター長 場所:RECNA1階会議室	9月17日(木)	2020年長崎日韓関係コンファレンス「コロナ19時 代の北東アジア平和協力」:吉田センター長、 鈴木副センター長
8月1日(土)	国際平和シンポジウム2020「核兵器廃絶への道 ～世界の危機に、歩みを止めない～」出席:吉田 センター長、鈴木副センター長、広瀬副センター長	9月18日(金)	バグウォッシュ会議諮問会議(オンライン):調副 学長、吉田センター長、鈴木副センター長
		9月23日(水)	核兵器廃絶長崎連絡協議会作業部会 場所:RECNA1階会議室
		9月26日(土)	2020年度核兵器廃絶市民講座講演:青来客員 教授 第2回「核時代の文学 偽(にせ)の語り部と小説の 真実」 場所:ミライon図書館(大村市)
		9月28日(月)	三川中学校平和教育講演:中村准教授 場所:三川中学校(長崎市)
		9月30日(水)	ナガサキ・ユース代表団第9期生募集記者会見: 調副学長、広瀬副センター長 場所:RECNA1階会議室

お知らせ

《核兵器廃絶市民講座》

応募期間：2020年10月13日(火)～10月28日(水)(必着)

第3回 沖縄と核 歴史を変えた1945年の空白

講師：コンペル・ラドミール 長崎大学多文化社会学部
准教授

日時：2020年10月24日(土) 13:30～15:00

場所：長崎県庁 大会議室(1F)

※ オンラインでライブ配信があります。

第4回 ローマ教皇の長崎訪問の意義

講師：高見 三明 カトリック長崎大司教区大司教

日時：2020年12月12日(土) 13:30～15:00

場所：長崎県庁 大会議室(1F)

※ オンラインでライブ配信があります。

第5回 核政策は変わるか 大統領選後のアメリカ

対談者：吉田 文彦 RECNAセンター長

太田 昌克 RECNA客員教授／

共同通信社編集委員

日時：2021年1月30日(土) 13:30～15:00

場所：長崎原爆資料館ホール

※ オンラインでライブ配信があります。

《ナガサキ・ユース代表団第9期生募集》

募集人員：8名

募集対象：長崎県内在住、在学、在勤の大学生、大学院生
および同程度の年齢の者で、所定の活動に参加
するうえで支障のない者。

募集説明会：

第1回 長崎大学核兵器廃絶研究センター1階 会議室
10月8日(木) 18:30～20:00

※ オンライン参加可能

第2回 長崎県立大学シーボルト校 本部棟2階特別会議室
10月9日(金) 18:30～20:00

第3回 長崎大学核兵器廃絶研究センター1階 会議室
10月10日(土) 10:30～12:00

※ オンライン参加可能

オンライン参加申込み先：

Email: pcu_nc@ml.nagasaki-u.ac.jp

募集要項および応募様式は、[こちら](#) からダウンロードしてください。

お問い合わせは TEL 095-819-2252 核兵器廃絶長崎連絡協議会事務局まで。

《被爆75年記念特別シンポジウム》

平和・軍縮教育の新たな展開 核兵器禁止条約の時代を見据えて

基調講演：山極壽一 京都大学前総長

日時：2020年11月25日(水) 18:00～20:00

場所：NBC ビデオホール

※ オンラインでライブ配信があります。

※ 詳細は [RECNAのホームページ](#) に掲載予定。



長崎大学核兵器廃絶研究センター

第9巻1号 2020年9月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター

〒852-8521 長崎市文教町1-14

Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165

E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp

http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

©2020 長崎大学核兵器廃絶研究センター